

## 大乘仏教の精神と現代社会

マイケル・パイ

岡本尚子 訳

最近日本を訪れた際(一九九〇年)、東京の山手線から三十分ほどのところにある、発展著しい郊外で仏壇屋に立ち寄った。大きいもの、小さいもの、装飾の多いもの、少ないものと、いつもながらの様々な種類が見られた。しかし、中でも目立って陳列されていた新しいモデルが

私の関心をひいた。というのも、二つの先端技術の特徴を備えていたからである。先ず、扉は手で持てるリモコン操作器で、まるでテレビを操るよう閉鎖された。店員が親切に実演してくれた。二つ目に、本体はすべて耐火性であり、これもまた実証された。といっても実際に実演されたのではなく、ビデオによってである。その中で普通のモデルは燃え上がり、耐火性のモデルは誇らし

げに燃えずに残っていた。言うまでもなくこの驚くべきハイテクモデルは安くはなかったが、仏教に真剣に帰依する日本人の家では、先祖の位牌の入った仏壇は最も大切な家具なのである。

このことを私が最も強く痛感したのは、一九七九年、かつて（一九六二年頃）住んでいたことのある都内の小さなアパートを再び訪れた時であった。それは、ふとんの押し入れの付いた六畳一間で、流しの付いた小さなキッチンとトイレがあり、第二春風荘というアパート六部屋の内のひとつであった。十七年後に戻ってきてみると、そこには四人家族が住んでおられた。良き昔の思い出にと、私と妻を中へ招き入れて下さった。彼らは創価学会員であった。創価学会は仏教の在家信徒団体で、私の若い頃はエネルギッシュで論議すら呼ぶ程の成長をしていた時期があつたが、その後非会員ともより緩やかな関係を持つようになり、日本の宗教界において確立された勢力となつている。そしてこの四人家族の六畳の部屋には、長方形の長い方の壁の中央付近に巨大な仏壇がそびえ立っていた。他に家具はほとんどなく、低いテーブ

ルとテレビ、旅行の土産物が詰まった薄っぺらい棚と、子供達のおもちやが二、三散らばっているだけであつた。明らかに仏壇はこの質素な低所得家族にとって主たる投資物であつた。そしてそのことは私達訪問者に大きな誇りをもつて示され、説明されたのである。

仏教社会あるいは仏教になじみのある社会に育っていない者にとつて、先祖の位牌の入った仏壇がこれほどの重要性を帯びるといふ事は時に、驚きとして映る。創価学会員の場合は別にして、その他の多くの場合、これは仏壇の中に先祖の位牌を入れるということの説明がつく。しかし、西洋人が書店に行き、仏の教えに関する書物を手にとってみても、どれも普通先祖崇拜に焦点を置いたものとは思えないであろう。確かに、現存する最古の仏典、すなわち上座部のパーリ語正典 (Pali Canon) (例えばシンガーローヴァーダ・スッタ Sīṅgālovāda Sutta) においては、信徒の徳行として家族の責任が扱われている。しかしながら、家の仏壇それ自体についての言及はどこにもない。又、日本の天台宗、日蓮系宗派を含む東アジアにおける仏教の様々な宗派、教団の依経となつてい

主な大乘諸経典にも、仏壇に関する言及は見当たらない。それでも上記の例で示したように、日本では仏壇は、伝統仏教のみならず最も現代的な在家仏教をも特徴づけるものなのである。

特に最初に言及したりリモコンのモデルは、少なくとも多少は仏教的な伝統をもつ社会に生きてきた仏教の、現代における強力な象徴である。第一にそれはディスプレイと実用性を組み合わせている。言い換えればディスプレイを都合よく操作することが出来るのである。ここで想像的な関連づけを行つてみたい。法華経によく見られる演出効果のアプローチとの関連づけである。例えば、虚空に浮かぶ塔（見宝塔品第十一）が仏の指一本で開かれると、禪定に入った多宝如来の姿が示される場面を思い浮かべればよい。第二に、ニューモデルの仏壇が単なる可燃性の木材ではなく耐火性で耐久性をもつという事は、たとえ災害に遭つた時でも、家の伝統の保証人である仏になつた先祖は無事だといふ事を意味する。ここで例の多宝如来を考えてみよう。禪定に入つてはいるけれども、神々しく変容した仏の姿という形において永遠に

存在し、仏教の教えの權威と継続性を証明するのである。

ビデオの中で、耐火性でない仏壇を燃やし尽くした猛火も同様に意義深い。火事は日本の都市生活において、地震と台風と共に伝統的な恐怖の対象である事は論を待たない。それは煩惱うす巻く、この世界をも象徴している。その意味においてそれは法華経比喩品第三の、仏が自らの様々な教えの乗り物によつて生けるものを娑婆世界から救い出そうとする譬えにも見られる。このように、祖先崇拜と仏教の相似を歴史的に説明しようとするまでもなく、リモコンの耐火性仏壇と法華経の教えの間に自然な類似性を見ることが出来る。

## 二

更に考えてみると、この場合何が古くて何が近代的なのであろうか？ 又何が前近代的で何が後近代的なのであろうか？ 近代的な耐火材を用いることで、この娑婆世界の猛火から自分を守ることが出来るのだろうか？ 後近代的なテレビ・リモコン操作器を使って信仰の象徴を開いたり閉じたりなど出来るのだろうか？ ここで私

は、仏教の解釈に当たって、私個人としては説教者というよりもむしろ観察者（オブザーバー）であるということを確認ねばならない。法華経は説教者すなわち法を説く者、サンスクリット語で言うダルマバーナカ Dharma-dhanaka には言及しているが、古代の經典であるため、観察し、又恐らく批判し介入役もする現代の宗教学者のことは気づいていない。その点に関しては、概して近代社会も、あるいは後近代社会すら、この観察者に気づいていない。そのような観察者は権威ある観点を持たず、その意見が公正であったとしても何の宗教的、組織的合法性も持たない。しかし、組織構造にかかわらずコミュニケーションは開かれているというのが今の時代の特徴のひとつである。そして宗教については、刺激や靈感を与えてくれる源は、それを伝統的に守護し解釈してきた人々の管理を越えて届けられるものなのである。つまり、大きな異った伝統の「精神」、あるいは「エートス」、あるいはもっと軽く言えば「精髓」のすべては、現代の多元主義と開放性の中では様々な人々によって享受されるものである。このような考えは対話とは少し異なるもの

平さ、悟りや慈悲の前向きな可能性もまた、くり返すものであろう。しかしながら、今ここで問題なのは、社会的文化的状況の真の変化という事実であり、ある程度仏教の教えの発達、展開においても認められてきた事実である。

その顕著な証拠として挙げられるのが、近代科学、特に物理学や天文学における発見を、仏教思想の正当性を示すものとして引証するという傾向であり、これは上座部や大乘仏教等においても見られる。この擁護の傾向は我々の時代には大きな可能性を持っているのかもしれないが、過去の時代において、近代科学がまだ繁栄していなかった頃、仏教はむしろ魔術の特に効果的な形であるために広められていたということを見逃すべきではない。人々が望んでいたものは疫病や災害、様々な外敵暴力から守られることであつたし、更に又、雨を求め、勿論良い収穫や繁栄も必要としていた。従って、超脱という偉大なる美德にもかかわらず、仏教の儀式はドゥ・ビゼール de Visser の『古代日本の仏教 (Buddhism in Ancient Japan)』に詳述されているように、儀式としてそれら

のである。何故なら（時折私に向けられるのだが）いったい誰が誰を代表しているのであろうか？ むしろそれはある思考の範囲であり、そこに宗教界はさらされ、それから不安によってひるむこともあればそこに確信に満ちて参加することもあるのである。このような観点から見ると、仏教の始まり、あるいはそれから五〇〇年後の大乗仏教の出現からさえ、今日までの時間の隔たりは非常に大きいものである。何の時間の隔たりもないかのうに生きようとする者もいるかもしれない。しかし、そこには何らかの自己欺瞞が存在する。確かに宗教的「真理」は、もしそれがまったく真実であるとすれば、何らかの方法で時を超越したものと考えられるかもしれない。普遍的正当性をとねえる教えなら、現時代の文化的な境界だけでなく、何世紀にもわたる文化的な境界をも越えろと考えることも出来るかもしれない。仏教者にとって、人間の状態、苦しみ、愚かさ、情念、束縛、悩み、病、老い、死といったものは、技術的に周りがどうなるうともこれまでさして変わってきていないものである。冷凍保存された肉体すらいつかは朽ちてゆく。喜びや公

べてを確保出来るよう工夫され作られていったのである。そして奇妙なことに、仏教のこの側面は、修正された形で今日に至るまで続いており、英国の各州では理解されていないとしても、アジアにおいては理解されている。かくして、仏教と近代科学の一貫性を主張し、その部分においては技術的な方法を示唆している一方で、このような現世利益を儀式的手段によって確保しようと努めるのはまったく自然なことであると考えられている。科学は「近代的」であるのに対し、儀式主義は古代のものでありながら同時に後近代的であるという説明も出来るかもしれない。しかしながらそのようなスタンスもはや、魔術がすべての人々によって当然と考えられていた社会において、古代の仏教が魔術を寛容していたスタンスではない。従って時の隔たりは明白である。先に述べたところの、時の隔たりを無視する時自己欺瞞が存在し得るという意味はこれである。

### 三

仏教における年代的展望や時の隔たりあるいは通事的

な文化の隔たりに、積極的に注目すべきである。次のようなことがよく言われる。すなわち、仏教者は歴史に關心を持たず、歴史的疑問に注意を払わない、何故ならそれらはいずれにしても仮の世界の範疇にあるからである。あるいは、仏教者は歴史的問題としての仏教の起源にも関心が無い、あの仏陀（すなわち釈迦）が実際に存在していたかどうかは重要ではないのだ、等々。これらの点は、しばしば仏教者以外のものによって、キリスト教との関連において出てくる好ましからぬ対比に対して防衛するために指摘される。もはやこれらの点を強調する必要はないかもしれない。今ある危険はむしろ、少なくとも幾人かの仏教者達の真に歴史的な展望が過小評価されているということである。ではそれはどのような展望であるのか、そしてどのようにして生まれてきたのであろうか？ これはまさに、仏教文化全体にかかわる歴大な問題である。そしてまったく研究されてもいない問題である。今はその動向・風向きを示す事柄をいくつか指摘することしか出来ない。それらはそれ自体はよく知られている事柄であろうが、このような観点からまとめ

整理しておくことにかけては広く知られた伝統を持つ中国人に、必然的な混乱を感じさせながら、中国へと伝えられた（実際のところ書誌学の起源は中国にあると言えるかもしれない）。

最終的に、様々な仏教経論を推定によって順序づけ、それを仏教の教えの明らかな発展、展開に結びつけようと試みたのは、中国の仏教者であった。中でも最も有名な（しかし唯一ではない）試みは、天台宗開祖智顛によるものであった。そしてそれが日本の天台宗や日蓮とその弟子達に引き継がれていった。この体系は歴史的発展を正確に反映したものではないが、次々と関心を生んでいき、法の異なる時という考え方、特に中世日本でかなり広まっていた末法時代という考えとの相関によって更に強化された。法然、親鸞等が、これを救いの万能の形態としての念仏へと飛躍する論拠として用いた一方で、日蓮はこれを法華経の真髓の新たな把握を促すものと考えた。これら仏教の思想家、説教者達すべての中には、時と場所に対する強い意識があった。仏教はもはや時代を超越したものではなかった。その結果少なくとも日本

て見られることは通常なかった。

先ず、仏教の最初の段階はある意味では特定の時代を越えたものであった。というのもそれは、代々続くアイデンティティを含む、朗誦の時代であったからである。変化は実在するが、気付かれず、又まったく認められるものでもなかった。異端派の經典等の文書の考証によって、歴史的展開に対する最初の意識が芽生える。つまり、変化による脅威を知覚することによって、何が正しいのかを暗唱だけでなく権威ある決定、すなわち正しく年代記に言葉を記録することによって意識的に区分することが必要となったのである。初期の仏教（ここでは論争的で実に時代錯誤なものとして小乗という用語は避けるが）におけるこの過程は、経律の地位を損なわせるものとはならなかった。それらは日付も筆者も記されないまま、引き続き宗教的に権威あるものであり続けた。そして大乘仏教の經典は、宗教史上最大の精神性的変容を隠しながら、原典詳述の継続的な過程の中で初期の経蔵に融合されていった。その結果としての經典の集成は、仏陀自身の権威を変わることなく保ちながら、又、書物や巻物を

においては、その後の世代の仏教指導者達も又、自分達が説く仏教は自分達の時代の仏教でなければならぬと認識していた。これを、大衆が経済的に何を支持するかという日和見主義的な問題として捉える人もいるかもしれない。しかし、自らの時代の本質について、又、現代の人間社会に影響を与えている大きな問題について、真実の疑問を問いかけるものとして捉える人もいるのである。この展望においてこそ、「在家の」仏教運動が理解を得るであろう。そのような運動は今日の日本にもいくつか存在する。聖職者の仏教「僧」の組織と関連しているものもあれば、独立しているものもある。日蓮あるいは法華経系の在家信徒団体、特に靈友会、立正佼成会、創価学会といった、たがいに独立し強調点を異にする教団があるだけでなく、禪宗、浄土宗等の伝統仏教においてもかなりの信徒活動が見られる事は重要である。かくして信徒による仏教、すなわち「在家仏教」が、現代世界にふさわしい仏教の形態であるという認識がますます深まっている。現代世界は理論的には多数の独身僧侶を経済的に支えることは出来ようが、一方で真に解決され

ねばならない問題の多くは俗生活の世界の問題であり、それらはそこで解決される必要があるのである。この傾向は、現代的逸脱といったものではない。何故なら大乘の伝説的人物、維摩詰 Vinakṛti という在家仏教の素晴らしい手本があるからである。維摩詰は、実業、神通力、仏智すべてに優れていたと描かれている。ここから、大乘仏教の「精神」とはどうあるべきかという重要な問いに至るのである。

#### 四

現在活動的な大乘仏教の宗派のほとんどは、称名念仏、座禪、真言、印などの実践や、各派の教義において特に重要とされる経典を強調している。しかしこのような相違は、彼らにとつての今の価値やそれを正当化する弁明がどのようなものであれ、キリスト教時代の始まりとほぼ同時期に起こった仏教の精神的活性化としての大乘の出現に続いているものである。当時あつた経典はそれぞれ大きくは一貫しており、知恵、洞察、空、慈悲、方便、菩薩道といった一連の思想を中心としている。これらの

の中の差別の様式は脅威にさらされたようである。後に空海にそのままの姿で仏になるという即身成仏を説かせ、道元をして、座禪の悟達の姿勢をとつた時我が身の仏性を覚知出来ると断言せしめたのは、この根元的なアプローチである。同様に日蓮は、題目に法華経の精髓を見、ひとつの簡単に唱えられるフレーズの力に、教え全体を融合させた。しかしテーマとして特に重要なのは僧と俗とのますます広がる逆説的な関係である。一連の苦しい逆境的生活の果てに遂に涅槃を極める僧侶の代わりに、大乘は普通の日常的環境の卑しい身分から始まるが遂にはすべてのものの為に様々異なる境涯間を自由に移動するようにまでなるという、菩薩の理想を宣揚した。その優れた者として前述したのは在家の維摩詰であるが、彼のすなわち聖職者の境界を越えての伝説的な活動は、彼の名前にちなんでつけられた維摩詰の中で誉め称えられている。ではなぜこの経典がどの宗派の所有物ともならなかったのだろうか？ 理由は、それが繰り返し聖職者の優越性を引き下げているからであることは疑念の余地がない。同様に、親しまれているにもかかわ

考え方は、釈迦に対する見方を微妙に変化させていった。普通の意味においての釈迦の人間としての存在はまさに軽く扱われるようになり、彼の有名な涅槃さえも、娑婆世界に執着しすぎている人々の為に行われた人為的なショーと解釈された。しかしいったんそう解釈されれば、もはや単なる涅槃という考え方に執着することは不必要であり、あるいは又まったく望ましいことではなくなる。それどころか「涅槃」自体を、法華経の化城の話のように相対的に考えねばならなくなる。このように、大乘の精神は、従来教えられてきた仏教のすべての側面に影響を及ぼす、この著しい変貌に見られると言えるのかもしれない。初期の仏教の思潮である空についての理想は、経験のすべての要素、すなわちすべての法を取り込むことにまで展開された。菩薩道は、少数の未来仏だけでなく、可能性としてすべての生けるものに当てはまるものとされた。そして成仏の概念も、少なくとも潜在するものとして、すべてのものに可能であると説かれた。煩惱からの救済、名目と形における空、無知なるものの中の仏性等の新しいアイデンティティの論理に、仏教の教え

らず般若心経もまた結局はどの宗派の依経にもなっていない。この経典も一連の主要な仏教の概念を、もっと簡単にではあるが一種の復唱の瞑想としての一種の儀式化された否定によって相対化している。ある特定の経典を依経とする宗派においてさえ、ある種の根底に流れるアソビヴァレンス（両面価値）を感じることが出来る。その理由は聖職者の為、ある教えあるいは実践方法を説いている一方でさえ、大乘仏教には、金剛般若経に説かれていく如く、充分に成長した菩薩は「無所住」という考え方が染み込んでいるからである。様々な宗派がどの経典よりも肯定的に扱う法華経においてさえ、仏教は最初に明確に語られた時のものとは異なると述べられている。ではこれはいったい現代社会にどのような意味を持つのであろうか？ 簡単に言ってしまうと、それは現代の仏教者がそういう意味を持ってほしいと願うものを意味するのであり、観察者が推量するものではないのである。しかし、今大乘仏教は、在家の強力な参画を伴う様々な現代的様式で表現され得るように思われるのである。

その動機は第一には主として自己や生活の向上、統合であるかもしれないが、進展していくことによって更に人道的援助や平和運動、文化の推進等、他者の為の様々な活動全般へと進んでいく。これらの活動は事実、専門的に組織された在家集団によってしばしば行われる。従って、人々が現実の世俗的な活動を通して自身の煩惱から解放されるという大乘仏教の逆説的本質を、理想的に反映しているのである。言うまでもなくここには組織的圧力という危険が隠されており、人々にあまり価値のない動機をいだけさせてしまうかもしれない。しかし、法華経の譬えで言えば、火宅から他者を助け出す手助けが出来るかもしれないという事は、非常に偉大な事である。社会的活動が現代の主要な問題、具体的には様々な隣人との真に平和的な関係の樹立、貧困や様々な種類の欠乏、剝奪の状態の克服、そして人類だけでなくすべての生あるものの命を尊重する教育等に対して向けられたならば、確かに有効な手段となるだろう。これらの問題は、地球が存続可能な生態系として維持出来るかというひとつの大きな問題の一部である。相関性という見方を持つ

仏教思想は、この点において資するところ大である。植物を含むすべての生あるもの、又微小の塵にさえ仏性を観る大乘仏教から、それを支えるメッセージがもたらされるのが特に妥当であろう。そのようなメッセージは隔離された、少数の聖職者集団のみからは生まれ得ない。壮大な民衆の集団を通じて伝えられ、更に幅広い範囲での行為の変革へと導かれる必要がある。もしそれが現実のものとなれば、大乘仏教の精神は現代社会において、時の隔たりをもともせず、広まったと言えるのかもしれない。

(ランカスター大学教授)

(訳・おかもとなおこ)